川の水

津木林 洋

ブルーシートを叩く雨の音が激しい。寝袋の上に横になっていた男は薄く目を開けた。真っ暗である。両手を腹の上で重ね、再び目を閉じて雨の音を聞いていると、自分が大海原に漂って直接雨を受けているような気分になってくる……。

足先が冷たい。はっとして目を覚ました。いつの間にか眠ってしまったようだ。雨の音がしない。川の音がいつもよりやけに近くに聞こえる。

男は上半身を起こし、木の枝からぶら下げた懐中電灯を点けた。水が足下まで来ている。男は大慌てで水に浮いている運動靴を履き、濡れた寝袋を丸めて抱え、膝下まである水の中を歩いてテントを出た。白く浮いているのはゴミ袋だろう。

男は河原より一段上の遊歩道に上がり、ブロックに腰を下ろした。黒々とした樹木の向こうに川の流れているのがうっすらと見える。テントの中の灯りはブルーの色をわずかに浮かび上がらせているだけだ。

夜が明けてきて、男は下に降りた。水に浮いているポリタンクをつかんで再び遊歩道に上がると、テニスコートの側にある水道栓に向かった。しかし途中でふっと、川の水を飲んでみようかと思いついた。洗濯や身体を洗ったりするのは川で済ませている。猫や犬は平気で川の水をなめているではないか。おれがそうしてはいけない理由などないはずだ。

男は戻ると水の中に入り、できるだけ本流に近づいて両手で水をすくった。薄茶色に濁っている。少しためらってから男は水を飲んだ。草の臭いがした。